Kakudai Mission Institute No.348
Magnify
拡大宣教学院 機関紙 マグニファイ

CONTENTS

巻頭メッセージ
私たちにふさわしい服
大野 護 師

特別講義レポート
グローバル・リーダー・インターン【ウィーク3、4】

伝道実践レポート
岩手伝道協力会

BOOK あらかると

8
2017 Aug.

私たちにふさわしい服

イエス・キリスト福音の群 東北中央教会 牧師 **大野 護** 師

夜はふけて、昼が近づきました。ですから、私たちは、やみのわざを打ち捨てて、光の武具を着けようではありませんか。遊興、酩酊、淫乱、好色、争い、ねたみの生活ではなく、昼間らしい、正しい生き方をしようではありませんか。主イエス・キリストを着なさい。肉の欲のために心を用いてはいけません。

（ローマ人への手紙13章12～14節）

1. 時にふさわしい格好

2017年春・夏のファッションでは、「ワイドパンツ」という太めのズボンを履いている方をよく見かけます。細身のジーンズが流行ったと思えば、太めのジーンズを着こなす流れがやってきたりと、流行の変化は早いものだと思わされます。そんななかでも、流行に左右されず、いつでもオシャレな人もいます。そのような人は、TPO（時・場所・場合）にふさわしい格好と行動をしていて、センスも良い。「いつ、どこで、どんな場面か」を把握して、なおかつ自身の存在の引き立てる服装を選んでいるように思います。

パウロは、今が昼間の時代になったことを把握していました。救われた弟子たちに「主イエス・キリストを着る」ことが、光の子にふさわしくて格好が良いとメッセージを発信したのです。

2. 昼間にふさわしい生き方

パウロの言う、昼間らしい正しい生き方とは何でしょうか。闇のわざを見てみると、「遊興、酩酊、淫乱、好色、争い、ねたみ」の生活が挙げられています。それらは罪からくるものであり、神様と人との関係を壊します。私たちも、光であるイエス様に出会わなければ、このような闇の生活を身に着けていたでしょう。けれども感謝なことに、光の子とされた私たちには、これらの生活がもはや「似合わなくなった」のです。闇のわざという時代遅れの生き方は、捨てるものとなったのです。また、パウロは光の武具を身に着けることを語りました。これこそ流行に流されない生き方です。神様の示される「真理」「正義」「平和の福音」「信仰」「救い」「御言葉」「御霊による祈り」を身にまとうことだといえます（エペソ6：11～18）。光の武具は、私たちが作りだしたものではなく、神様がくださったものです。ですから、これらの生き方はすべて神様から示され、着せられ、身に着けていくのものなのです。

3. 主イエス・キリストを着る

高級ブランド品を身に着けて、すぐにその人のセンスが良くなるとは限りません。新卒の就活生が、リクルートスーツを着て肌になじむまで時間がかかるように、身に着けたものを着こなすには時間が必要です。同じように、私たちはただイエス様のことを高級ブランド品として着るのではありません。イエス様の価値観が肌になじむまで、イエス様とともに人生を生きる時間が必要です。御言葉がそれを助けます。

高級品を身に着けた人自身が尊くなるのではなく、高級品自体に価値があり、力があります。だから、イエス様を着た「私」が強くなるのではないのです。イエス様との関係の中で「弱い」私に気づかされます。そして高価で尊いイエス様が、私の身を覆ってくださったことに愛を感じるのです。「光の子」は、周囲に自分がどれほど尊いかと見せびらかしたりしません。光の子にふさわしいのは神様の愛を感じながら感謝して生きている姿です。

イエス様は、昨日も今日も、いつまでも変わりません。それでいて時代遅れにならず最先端の新しいことをなさいます。いつでも、どこでも、どんな場面でも、人を救われます。これほど素晴らしくセンスのあるお方が、私たちとともに宣教に携わっておられるのです。

ぜひとも私たちは、毎朝服を着るように、新しい心で主イエス・キリストを着て、そして忘れずに光の武具を身に着けて1日をスタートさせていこうではありませんか。

Program 8月のプログラム

1（火）～4（金）

グローバル・リーダー・インターン 2017

6月から約2ヵ月に渡り行われてきた「グローバル・リーダー・インターン」。いよいよ最終週となります。

14（月）～15（火）

リフレッシュ・パワフル聖会

今回で15回目の開催となる、毎年恒例の「リフレッシュ・パワフル聖会」。テーマは「教会を増やす」。

※8月は基本的に授業が無く、上記以外の日は、実践伝道や奉仕の予定となっております。

学院長のデスクから

いつも私ども拡大宣教学院のために祈り、さまざまな形でご支援くださっておりますこと、心より御礼申し上げます。

8月4日まで続いたGlobal Leader Intern（グローバル・リーダー・インターン）と合わせ、香港からの三つのチームを迎えるなど、大変充実した6、7月を過ごすことができました。現在は夏の聖会や集会のための準備に取り組んでおります。引き続き、学院生一人ひとりの学びと訓練が守られ、祝福されますよう、お祈りください。

また、10月からスタートする後期からの入学生も募集しております。（詳細は学院までお問い合わせください。）

来年30周年を迎える学院では、施設の老朽化などさまざまな必要を抱えております。より一層のご支援をよろしくお願いいたします。

まだまだ暑い日々が続いておりますが、皆さまがいつも守られ、ますます祝福されますよう、心よりお祈りいたします！

学院長　永井信義

編集後記

ハレルヤ!! 少し遅れましたが、今回も無事に発行出来た事を感謝します!!

さて、今回の編集後記は、少しお証しをさせて頂きたいと思います。私がアルバイトをさせて頂いているNPO団体では、毎年夏に、被災地支援の一環として、南相馬に住む子供たちをキャンプに招待しています。今年は、そのキャンプのなかで「スーパーブック」という DVD（二人の子どもとロボットが聖書の世界にタイムスリップする話で、聖書のベーシックな内容を学べるもの）を見せて、それにちなんだ工作をするプログラムを行いました。そのなかで、DVDを観た後に、この活動のリーダーがDVDの内容について、もう一度詳しく聖書の話しをし、イエス様にお祈りをする事を勧めました。私は正直、聖書の話に触れたことのないノンクリスチャンの子ども達に、その話は難しいのでは?と思いました。しかし、私の思いが不信仰であった事に気付かされ、悔い改めさせられる時が来ました。

キャンプ最終日、一人の男の子が私に「靴を汚したこと、お母さんに怒られたらどうしよう」と言ってきました。この男の子はすごく心配性で、キャンプの間も、ひたすら色々な事について心配していました。この靴のことも、もう5回目くらいです。少し呆れ気味の私に彼は言いました。「イエス様にお祈りすれば良いかなぁ。」私は、驚きながらも「そうだね。お祈りしてみたら?」と言いました。すると彼は、両手を組んで目を閉じ、少しうつむいて、少しの時間静かにお祈りしました。私は嬉しくなりました。さらに、その帰りのバスのなかでも、イエス様の十字架について話し、少しだけ証しをする機会が与えられました。

私たちは、「時が良くても悪くても」（IIテモテ4:2）、「彼らが聞いても、聞かなくても」（エゼキエル2:7）、御言葉を宣べ伝える事が必要であると、改めて気付かされました。感謝!!

東海林 真

Magnify 拡大宣教学院 機関紙 マグニファイ ■発行人：永井 信義 ■編集：東海林 真

〒981-3604 宮城県黒川郡大衡村ゴスペルタウン 022-345-2991 FAX 022-345-2992
gospeltown@infoseek.jp 郵便振替：02240-7-34622 facebook「gospeltown」

特別講義レポート　**グローバル・リーダー・インターン 2017**　June 13 , 2017～August 4 , 2017

GLOBAL LEADER INTERN

弟子として共に成長し、
グローバルな視点で宣教に取り組む
次世代リーダーを日本で養成するプログラム

前号に引き続き、GLI の講義の内容や様子をレポートして頂きました。今回は、第3週目と4週目です。

Report No.3　GLI Week 3【6/27-30】

第26期生　掛端 舞子

GLI 第3週目の27日は、スー・タカモト先生による「タイムライン」について。ミニストリーにとって一番重要な要素は、神様の力強い臨在。臨在なしでは生きていけない！そのような霊性を持っているか、「主が共にいる」かが重要。よく耳にする事ですが、それは、私達がいつの間にか神中心ではなく、人間中心、また神実現ではなく自己実現に陥りやすいからだと思わされました。

神様との日々の関係、そして誰に繋がって実を結ぶのか（ヨハネ 15：1～5）、常に自己点検と吟味が必要だと再確認致しました。

28日は、ロバート・アデーア先生による「異文化」について、福音を伝えるために他の文化を知る必要がある（I コリント 9：20～23）ことや、違うことの善し悪しではなく、いかに違いを認めるか、また「一致」とは、「同じ」になることではないこと､それらを理解できるかどうかが、重要だと学びました。

29日と30日は、松田牧人先生による「震災と宣教」について。29日の講義のテーマは「壊れたものを回復させる神」。松田先生ご自身の人生のテーマでもあり、これまでの歩みや働き、そのなかで起きた回復などをお証し下さいました。「回復」は､神ご自身の働き（IIコリント3:18）であり、自分で何とかすることではない。神に信頼し、待つことが必要。神は時間を掛け、練りながら回復して下さいます。更に、心に響き、大切だなと思ったことは「ペースを落とすこと」。騒ぐのは一瞬ですが、静まるにはとても時間がかかります。意図的に静まる時間を持つことは、神と向き合い、自分と向き合うことになり、霊性形成に繋がるのだと思いました。

30日は、松田先生が牧会する教会「オアシスチャペル」がある「オアシスセンター」で課外授業が行われました。敷地内には、キャンプ場やカフェがあり、見学させて頂きました。

講義をしてくださった先生方一人ひとりと、この機会を与えて下さった神様の恵みに感謝します。

Report No.4　GLI Week 4【7/4-7】

第26期生　東海林 悦子

GLI 第4週目の一日目は、塩釜聖書バプテスト教会の大友幸一先生が「教会開拓」について、二日目は同教会の開拓教会（家の教会）のリーダーである大友恒雄さん、まり子さんご夫妻が、「家の教会」について講義してくださいました。

塩釜聖書バプテスト教会は、宮城県沿岸部にあり、東日本大震災で被災した教会です。教会自体は、津波の被害から免れましたが、大友さんご夫妻のご自宅でもある、井戸浜という地区にあった家の教会は、津波によって大きな被害を受けました。しかし、大きな試練のなか、母教会が震災直後から復興支援の拠点として用いられました。また、流されてしまった家の教会も、新しい自宅が与えられ、地域に密着し、人々に寄り添う支援を開始されました。それから家の教会としても、牧会を継続する事が出来ています。

大友先生は、その経験から試練に会っても、継続して用いられる「イエス・キリストという土台の上に立つ教会形成」について教えてくださいました。そのなかで、私がとても興味をもったことは、「家の教会」についてでした。「家の教会」は、聖書（使徒時代）に記録されている宣教をモデルとしていて、会堂建築、牧師給という経済的問題がなく、聖霊の導きによる身軽な教会であることが特徴であり、地域密着型なので信頼関係を築きやすいこと。さらには、その地域にふさわしい教会形成が出来ると教えてくださいました。また、「教会形成のゴールは宣教でなくてはならない」と､力強く､にこやかに語ってくださったことがとても印象的でした。

信徒を教育し、リーダーとして訓練し、教会開拓へと送り出す、信徒が主体となる開拓伝道。私はこの講義を受けて、どんなことがあっても、揺らぐことのないイエス・キリストを土台にしっかりと立ち、仕え続けて行くため、そして仕える人を育てる人となるため、訓練されていきたいと強く思わされました。

この学びの機会を与えてくださった主に感謝します。

伝道実践レポート　**岩手伝道協力会**　第25期生　佐藤 慎

岩手県大槌町で伝道して来ました♪

7月10日～12日の3日間、学生を含むGLIメンバーと大野護先生と共に、毎年恒例の岩手伝道協力会に行ってきました。今回は、「岩手ジョイフルチャペル」のチラシと、様々な方々の証しが掲載されているトラクトを、一軒一軒ポスティングしました。岩手ジョイフルチャペルの牧師であられるミジェル先生はペルー人で、以前から興味があったスペイン語を教えてもらいつつ、3日間のなかでアクシデントや珍事もありましたが、とてもよい雰囲気の中で無事に終えることが出来ました。その3日間の様子を少しだけですが、レポートさせて頂きます。

まず1日目、私たちのチーム（毎回2人～3人のチームで手分けして配布）は小鎚という地域の住宅街に行ってきました。そこではおよそ800枚ほどポスティングしました。炎天下のなか、ひたすら配り歩きましたが、配り終えた後のアイスが五臓六腑にしみわたりました。また、近くにあったスーパーのお母さんは、ミジェル先生とお知り合いで､忙しいなか､家の中に入れて下さり､コーヒーでおもてなしして頂き､色々な話をすることが出来ました。神様が与えて下さった出会いに感謝します!

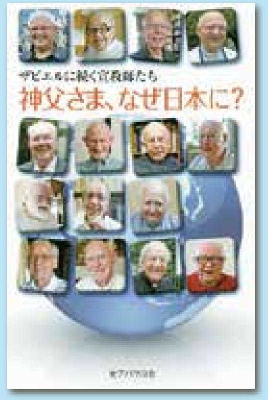
2日目は、山の奥へ奥へと、車で小一時間ほどですが、スマホも圏外になるほど奥へと行きました。そこから、トラクトを配りながら3時間ほどかけて山を降りてきました。神様が想像された大自然を堪能し、感動しながら、その地域の方々が福音を受け入れることが出来るように、祈りつつ山を後にしました。午後からは仮設住宅でポスティングを行いました。宮城では、あまり見かけない仮設の商店街があったりと、そこで生活している方々が試行錯誤しながらも、必死に生きている姿を見て、なんとしてでもこの方々を救いに導かなければいけないと強く感じました。そして夜は岩手ジョイフルチャペルで祈祷会を行いました。賛美し祈り、メッセージを聞き、神様が私たちに地上で託して下さっている使命を再確認し、心が燃やされました。

最終日は、チラシやトラクトをすべて配りきってしまっていたので、観光……イヤ、視察に行ってきました。最初は津波の被害にあわれた方々の慰霊碑が設置されているところへ行きました。そこは少し高いところにあり、町全体を見渡すことが出来ます。津波がどれほどの脅威だったかを目の当たりにし、その町の救いのために、またご遺族の慰めのために、メンバー全員で祈りました。次に、あの「ひょっこりひょうたん島」のモデルにもなったとされる、「蓬莱島」というところに行き、吉里吉里（キリキリ）海水浴場でひと休みしました。

この3日間多くのことを学びました。そしてとても楽しかったです。この伝道協力会に参加して下さった方々、またこのような機会を与えて下さった神様に感謝します。

BOOK あらかると

永井信義



人気作家によって新聞の書評でも取り上げられた一冊、女子パウロ会編『ザビエルに続く宣教師たち　神父さま､なぜ日本に？』（女子パウロ会）では､「『日本語』という大きな壁を乗り越え､文化、生活習慣のまったく違う日本に、キリストがもたらす“永遠のいのち”と“赦し”を、キリストの愛と奉仕を生きながら宣べ伝えてこられた」、15 人の宣教師たちが紹介されています。彼らのことばから多くのことを学ぶことができると思います。

「教会の福音宣教の中心はキリストを人びとに紹介することです。日本人での外国人でも司祭でも信徒でもみんな同じ使命があります。」